



奇 冒
談 険

少

女

島

(三)

永代美知代

ラツキー大探偵

▲まゆみさん此の探偵を▼

二十餘人の少女を船室の底深く閉ぢこめ、オランダの國旗を掲げてロンドンから、英國海峡を出はづれた怪しい汽船は、洋上にたゞ一つある、ある無人無名の島へと、夜の海を躊躇つてひたすらに航路を進めてゐる。

少女達は次第に長い意識から覺めて、思ひがけない船室に自分を見出した時、ある者は泣き、ある者は恐れ戦いた。それが一人々々船長室へ呼び上げられて、ロッグに脅された。ロッグはきら／＼する拳銃を少女の目の前に突き付けて、口授する通りに手紙を書かす。

「お父様、私は殺されかゝつてゐます。もし私をお愛し下さるならば、どうぞ英國の軍艦の所在地を詳

しく書いて、明後日の正午中央郵便局の私書函百五
號へ入れて下さい。お父様が警察へ訴へたり、探偵
を郵便局へつけたりなさらず、本當の事を書いてお
送り下されば、私は一週間の晩に、きつと許され
て歸ります。もしさうでない、私は殺されてしま
ひます。」

ある海軍大將の少女はさう書かされた。大臣の少
女は政治の秘密を、發明家の娘は發明の秘密を、と云
つた風に、それ／＼その父の身分に従つて、その望
む品の名だけを代へて、あとの文句は皆同じやうに
書かせられた。

もう二三人でそれが済まうといふ時、船は漂渺と
した海中の小さな島の岸へ、汽笛も鳴らさず、横付
けにされた。二百噸ばかりの小さな船だから、ちや
うど壁のやうに削り成された岸へびつたり付くこと
ができた。續いて鐘が下された。

船が着いたと知るが早い、まゆみはアスターと
一緒に船室の外へ走つて出た。二人とも右手に拳銃

くつた。

「さアまゆみさん、あなたがこの爆彈を持つてゐて
もし此奴等が敵對ひさうだつたら、構はない、
思ひ切り投げつけて下さい。」

何といふ大膽さであらう。爆彈をたつた
十二歳のまゆみに渡すマックスも大膽
なれば、それを受け取つて船員達の容子
を見つめてゐるまゆみも、大膽な少女で
はある。

マックスは苦も
無く船員を小口
から縛り上げた。
火夫も水夫も、
乗組員といふ乗
組員はみんな高
手小手に縛り上げられ
てしまつた。

「莫逆者たちめが！吾輩を誰と思つてゐる？米國



の大探偵ラッキ・ホーンと云へば、汝達も知つと
らう。」

果せるかな、マックスとは假
の名であつた。

その名にしても、
この青年がラッ
キ大探偵であ
るとは、さすが
のまゆみも思ひ
がけなかつた。
「いや御苦勞で
した、まゆみさ
ん、アスターさ
んも早く一緒に
行つて皆を助け
出させよう。」

ラッキ大探偵は二少女を連れて少女達の泣き聲
つてゐる船室へ下りて行つた。

せめて飛行機でも

▲船をべき船が沈んだ

二十何人の少女は、船から岸へ、岸から砂道を傳つて、無人島の奥深く進んで行つた。道々ラッキ大探偵は、できるだけ皆の心を休めようとして、いろ／＼の事を説明した。

「この島には男は一人も居ないんでね。年寄の女が二人ゐて、前に擡つて來られた三十何人の少女達の世話をしてゐるから、まア云はゞ少女島だ、ロツグのやうな悪人が悪い事をする間は、少女島獄だつたが、今日からはもう楽しい少女島になる譯さ、僕がどうにかして、一日も早く皆さんをロンドンへ連れて歸るから、それまでは安心して楽しく暮してゐなさい。」

話しながら岸から二丁も來たと思ふ頃、忽ち天地を動かすやうな大爆音が一同を驚かせた。中にもラッキ大探偵は、覺えず呀と呼んで、一散にもと來

た岸邊へ駆けて行く。

見よ／＼、今まで浮んでゐた汽船が、微塵になつて沈没しつゝあるではないか!

「まア! まゆみさん、どうしたのでせう!」

「大丈夫! アスターさん、悪人が自滅したのだわ。」

「自滅つて?」

「きつとロツグが誰かゞ、自身で船を爆発させたのでせう。」

その通りであつた。少時して駆けもどつてきた大探偵は、かう云つた。

「僕があんまり急いで忘れてゐたのだ。船長室にはウンと爆発薬があつたのです。ロツグが自暴になつて、それに火を附けたのでせう。それで悪人はみんな沈んで死んでしまつた。」

「まア嬉しい!」と、一人の少女は本當に嬉しさうに叫んだ。みんなも手を叩いて痛快がつた。然し、まゆみ唯一人だけは心配さうな顔をして、そつと大探偵に訊ねた。

「私達はどうして歸りますの?」

「それなんだ。困るのはねえ。」

「この島へは何處の汽船も寄



りはしないんでせう?」

「寄航しませんね、何しろ無人島だからね。」

「困りましたわねえ。」

「困つたよ。然しまア、その中に何とか好い工夫があるだらう。」

しかし、心の底で世にも絶望的な煩悶をしてゐるその大探偵の苦しい心持が、まゆみには判然わかつたのである。

悪人の手から、やつと遭れたと思へば、歸るべき船がない。翼があれば飛べもしようけれど。

「せめて飛行機か飛行船でもあればねえ。」

何心なくまゆみが口走ると、ラッキ―大探偵は逃げつたやうな晴れやかな節をして、突然まゆみの手を握つた。

「忘れてゐた。すつかり忘れてゐた。あなたが有名なとして立派な少女飛行家だといふことを——あゝお蔭で助かつた。」

まゆみは又、あく気の毒だ、さすがの大探偵と云はれるこの人も、あまりの失望ですこし気が變になつたのではないかと思つた。

「まゆみさん、あなたは救ひの天使だ。六十人近い少女の命を救ふ人は、あなた一人だ。一つ奮發して下さい。英國のどこかの海岸まで歸つて下さい。そしてみんなの救ひ船を寄越して下さい。あゝ何といふ仕合せなこつた。」

「だつて——」まゆみは不審氣に「肝心の飛行機が無いぢやありませんか。」

「處かね、それが有るんだから有り難い。」

「え、この島に？」

「左様」と、大探偵はにつこりした。

「ロツデがね、すつと前にドイッから飛行機を一臺運んできて、この島へ藏つて置いたのがある。まさかあなたを乗せるつもりでも無かつたらうが、はい。いや、まつたく天運だ。」

と、ラッキ―は嬉しうにまた、まゆみの顔を見て歩き出した。